随想

歴史点描

岡藩史を読んで学ぶこと（二）

古藤田　太
（会員　佐伯市弥生）

中川清秀が賤ヶ岳戦で戦死したのは天正十一年四月であった。その戦死の報は清秀の長男秀政（十六才）・二男秀成（十四才）の居た茨城城にもたらされた。兄弟は早速千五百の兵を率いて近江まで出馬すると凱旋の秀吉軍に会うことができた。

秀吉は上機嫌で、兄弟二人に「父の仇だ、存分にせい」と言って捕らえられた佐久間盛政を引き渡した。秀政は秀吉に「お褒の御言葉をいただき、その上玄蕃を下しおかれること真に有難いことなれど、父の戦死は義の当然で、私共は恨みを含むことは少しもございません」と答えると、秀吉は「さすが勇将の息だ」と感じ入ったと云う。

この佐久間盛政については「川角太平記」外いろいろ記されているようだが、何れが正しいか、という点では浅学の私には解らない。

秀吉はかねて佐久間氏に親近感をもっておられたようだ。盛政が生まれた御器所西城は、秀吉の母が実家に帰って、秀吉を生んだとされる御器所屋敷とは四百米（メートル）しか離れていない。秀吉は盛政がケガをし農民に捕らえられ縄目をかけられたことをいたましく思ったと「川角太平記」は記しているようだ。秀吉は縄を解きいたわりを以て接したと記されている。盛政を捕らえた農民達は、農民にふさわしくない所行だと磔にしたと伝えられる。

その後、秀吉は秀政の弟秀成に、本来仇である佐久間盛政の娘「虎」を双方父親の無い者同志、天下人秀吉の名を以て二人の結婚を命じたのである。

秀吉は盛政に大紋を染め抜いた紅色広袖に裏は紅梅をあしらった小袖を送った。盛政はこれをまとって京の町をひき廻された。秀吉は切腹にしようとしたが、盛政は自ら刑死を願ったと伝えられる。盛政は

世の中をめぐりも果てぬ小車は
火宅の門を出（いず）るなりけり

と辞世歌を残して天正十一年五月十二日槙島において斬首された。三十才であった。中川清秀の遺領茨城十三万石は一万石を加増されて、播磨国（兵庫県）三木城十三万石に転封となった。弟の秀成は兄と共に秀吉の国内統一のために転戦を続けた。

文禄元年の朝鮮出兵（文禄の役）に当たり三千余人の手兵を引き連れて朝鮮出兵となった。秀政は父清秀に似て、機敏で武勇にすぐれた武将であった。秀政は福島政則・長曽我部元親・蜂須賀家政ら六名の武将の棟りょうとして出発。釜山沖の海戦では家臣の柴山両賀が敵を焼討の功をたてたのをはじめ、中川軍は大いに善戦した。

【表紙写真解説】

昭和三年十一月、藩祖を祀る毛利神社が城山山頂天守台に創建された。正面石段もこのとき築造された。表紙写真は「絵はがき」にされた創建当時の毛利神社で英文の説明も付されている。昭和二十年四月二十六日の空襲で破壊された。（写真提供・並河正明）

毛利神社側面（神殿と拝殿）